

**科学研究費助成事業 研究成果報告書**

平成 28 年 6 月 28 日現在

機関番号：32625

研究種目：基盤研究(B) (一般)

研究期間：2013～2015

課題番号：25285221

研究課題名(和文) &lt;性&gt;に関する教育の内容構成・教育課程とジェンダー平等意識・セクシュアリティ形成

研究課題名(英文) The Impact of School Curriculum on Development of Gender Perspectives and sexuality.

研究代表者

橋本 紀子 (HASHIMOTO, Noriko)

女子栄養大学・栄養学部・教授

研究者番号：20138530

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 10,400,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は日本の性・ジェンダー・セクシュアリティ教育について明らかにすることを目的としている。そのための作業課題として(1)日本の教科書の変遷の調査。(2)海外の教科書の分析。(3)日本におけるジェンダー・セクシュアリティの変遷を明らかにするための世代別インタビュー。(4)大学生のジェンダー意識調査という4つの調査を行った。

その結果、日本では若者世代が必要としている科学的かつ具体的な性・セクシュアリティに関する記述や、性を関係性や人権、文化のひとつとして捉える視点が不足していることや、1982～1996年頃に日本人のジェンダー平等やセクシュアリティ観が大きく変化したことが明らかになった。

研究成果の概要(英文)：The purpose of this study is reveal education about gender equality and sexuality in Japan. For that purpose, we set 4 tasks. (1)Investigation of evolutions in the school textbook in Japan. (2)Analysis of the textbooks in foreign countries. (3)Interview about gender equality and sexuality for each generation. (4) Survey of attitude toward gender equality and sexuality for university students.

As a result from task 1 and 2, we found that Japanese textbook lacked concrete and scientific description about sex and sexuality which was needed by youth. It also lacked the perspective of sexuality as human rights and culture. As a result from task 3 and 4, we found that 1982-1996 was turning point of Japanese perspective of gender equality and sexuality.

研究分野：教育学

キーワード：教育学 学校教育 教育内容 ジェンダー平等 セクシュアリティ 性教育

### 1. 研究開始当初の背景

全国公立高校の98%が男女共学であるという現在、大部分の生徒が共学の学校教育を受容する。しかし共学制度下でのジェンダー平等教育やセクシュアリティ教育の不足は従来から指摘されてきた。そこへ、今、新たな視点からの課題が提起されている。“女性の加齢による妊孕力の低下や男性が原因による不妊などの生理学的知識は、学校では教えられておらず、日本の深刻な少子化の遠因でもある”という指摘だ。また、「第5回男女の生活と意識に関する調査」(厚生労働科研費研究班2010年)では、セックスに「関心がない」又は「嫌悪している」と答えた10代後半・20代前半男性が、2年前の調査に比べて倍増し、10代後半・20代前半女性も10ポイント以上増加するなど、若者のセックス離れが指摘されている。これらの実態からは、生理学的、性科学的な知識と同時に、性に対するポジティブなイメージの形成や多様な人間存在への理解と対等平等な関係性の作り方を学べる教育内容・教育課程・教科書が求められていることが伺われる。また、戦後の男女共学制は日本人の性規範や性意識に、どのような影響を与えたのかという視点からの本格的な考察が、求められている。

しかし<性>に関する教育を海外諸国の性教育を視野に、教育課程編成上の問題として、かつ、過年度の教科書も含めて小学・中学・高校段階の複数の教科書を体系的、歴史的に分析している研究は、ほとんど見当たらない。さらに、ある年度に生まれた子どもが、小・中・高と、どの年版の教科書を使用しながら成長してきたのかという改訂周期を整理した上での分析も行われていない。

このような中で、本研究に最も大きく関わる先行研究として、『10代の性感染症急増下の日本における性教育の実態と課題に関する研究』(2006-2008年度、科研基盤B、橋本紀子)と『子どものジェンダー平等意識形成と学校に関する総合的研究～戦後男女共学制の総括』(2009-2011年度、科研基盤B、橋本紀子)がある。

### 2. 研究の目的

本研究の目的は、<性>に関する教育の視点からの教科書分析とジェンダー/セクシュアリティ形成に関する世代別調査を通じて、学校における教育内容・教育課程の課題について検討することである。具体的には以下の2点である。

- (1) <性>に関する教育の視点からの教科書分析と教育課程への位置づけの検討
- (2) ジェンダー平等意識・セクシュアリティ形成に関する世代別調査によって、世代によるジェンダー平等意識、性規範、性行動の特徴を明らかにする。

### 3. 研究の方法

前述した2つの目的のため本研究では4

つの作業課題を設定した。

- (1) 日本の現行および過年度の教科書の収集・閲覧と分析
- (2) 海外の性教育関連教科書の収集と分析
- (3) ジェンダー・セクシュアリティ形成に関する世代別インタビュー調査
- (4) 大学生世代への質問紙調査

課題(1)および(2)は、目的(1)の検討のため、課題(3)および(4)は目的(2)の検討のため行われる。

### 4. 研究成果

4つの作業課題を(1)～(4)として報告する。(1)日本の現行および過年度の教科書の収集・閲覧と分析

保健体育の教科書を中心に分析すると、以下～の時期に区分することができた。

終戦後、1949年5月に中学、6月に高校の体育科が保健体育科に改められる。さらに、同年11月『中等学校保健計画実施要領(試案)』が通達され、「健康教育の内容」の13項目のうちの一つに、性教育に大きく関連する「成熟期への到達」が示される。保健科の教科書は『中等学校保健計画実施要領(試案)』に準拠して作成され、「成熟期への到達」の分野に性教育に関連する内容がまとまって示された教科書が1951年度から使用されはじめた。

中学校では1956年3月「中学校保健体育科のうち保健の学習の指導について」(文部省初等中等教育局長通達)によって、高校では1956年1月『高等学校保健体育科編改訂版』によって、保健の学習内容が改訂される。改訂された理由は、『中等学校保健計画実施要領(試案)』で中学校と高等学校の学習内容が分けずに示されたため、特に中学校で内容を消化できなかったことが指摘されている。この改訂によって、中学校・高校ともに保健科教科書は、性教育に関連する内容が縮小・分散化される。

1960年代は性教育に関して記述が少ない教科書が使用されていたが、1970年代の性教育ブーム(純潔教育から性教育への転換)のさなか、1970年改訂の『高等学校学習指導要領』に準拠した1973年からの保健体育科教科書で、避妊(受胎調節)について記述されるようになり、さらに、1978年改訂の『高等学校学習指導要領』に準拠した1982年からの教科書では、避妊についての内容がさらに詳しくなる。また、1969年改訂の『中学校学習指導要領』に準拠した1972年からの中学校保健教科書には、性感染症(性病)の概要について記述される。1960年代に比べると、1970年代以降の教科書における性教育に関連する記述は増えている。

1980年代後半のエイズパニックを経て、1989年に『小学校学習指導要領』が改訂され、1992年から小学校5年の理科に「ヒトの発生」を扱うようになり、小学校にはそれまでなかった保健の教科書が5年から使用され始める。

さらに、1998年の『小学校学習指導要領』の改訂により初経・精通を含む「体の発育・発達」について2002年から4年生で学習することとなり、保健の教科書も2002年から小学校3・4年生用が使用され始める。また、中学校では1997年から使用され始めた教科書がエイズについて掲載し、1998年の『中学校学習指導要領』の改訂では、2002年より3年生でエイズ及び性感染症について取り扱うことが示されている。

以上のように、教科書における性教育に関する内容は、「成熟期への到達」としてまとまって示された時期、「成熟期への到達」の内容が分散・縮小化して内容が少なくなった時期、中学で性病について高校で受胎調節について記述されるなど記述量を回復していった時期、エイズパニック以後小学校でも教科書をとおして学習されるようになった時期、に区分することができた。

#### (2) 海外の性教育関連教科書の収集と分析

以下の4か国についてのみ報告する。

フランスでは、性教育関連事項は中学、高校とも「科学」の生物領域で扱われる。中学では避妊の仕組みと避妊方法について多く取り上げ、高校では男女両性の不妊原因と不妊治療について最新の科学的知見を紹介し、さらに、生命倫理の各国比較など社会制度的な側面までその視野は広がっている。受精の機序に関する研究の進展に即して、それらがどこを阻止することで、避妊ができているかなどまで教える。胎児の性決定の際の性決定遺伝子の役割の重要性を説明し、受精の段階における多様な性の出現の可能性を理解させ、性的アイデンティティと性的指向についても説明する。その後、トランスジェンダーとホモセクシュアルの人たちの人権擁護のパレードの写真を掲載する。

フィンランドでは、性教育関連事項は中学、高校とも「人間生物学」と「健康教育」で扱っている。一般に、健康教育の方が日常生活次元で起きる性の問題に対して、多様な性を含む関係性を軸に扱っており、人間生物学の方が、人体、生理学的な次元で生殖、出産、避妊、中絶、不妊、染色体と遺伝子等を扱っている。この他、宗教や倫理の教科書でもこれらのテーマで討論することを求めている。

ドイツでは「生物」がこの分野を担当している。5-6学年(11~12歳)の教科書でも、避妊に関する説明があり、7-8学年(13~14歳)教科書では受精、卵割などを詳しく説明。生物で人間を扱うということは、倫理的次元も含めて扱うということであり、コントロールという生物学的な基本コンセプトを性行動に応用するという意味も説明もある。7-10学年(13~16歳)教科書では、「初めての交際」という単元で、付き合い始めてから出会う場面を想定して話は展開するが、最後に避妊について具体的に述べるものになっている。総じて、ドイツの中等学校の生物の教科書は、人間の性や生殖に関する

生理学的な知識や実践的スキルだけでなく、性行動に関して生命倫理や性の価値的側面からも考えさせ、子どもの遭遇する日常場面を想定するなどの工夫がされていることが特徴的である。

韓国では、性教育関連事項は保健、体育、家庭、道徳、生活と倫理等の教科で扱われており、小学校も含めどの教科書も共通して取り上げているのは、性暴力の予防と対処法である。

「高校保健」では、同性愛に対しては、青少年期には性自認が混乱することもあると指摘する一方、韓国内の同性愛反対論と彼らの基本的人権を保障すべきという国家人権委員会の勧告の両方を紹介している。また、人間の性や生殖に関して日本のような制限がない分、「中学校保健」でも「妊娠と避妊」の箇所では、緊急避妊薬ピルも取り上げており、コンドームの装着方法も図示されている。ただし、フランスの「科学」のように避妊や不妊の取り扱いは生理学的医学的に十分でない面がある。

日本は医学的、生理学的な情報や知識の点での改善と性的少数者を含む多様な人間存在を認めた教科書作りが求められている。

#### (3) ジェンダー・セクシュアリティ形成に関する世代別インタビュー調査

目的：戦後日本の青少年のジェンダー平等意識、とりわけ、セクシュアリティ形成が各世代の教育課程の違いや社会的変化との関連でどのように変遷してきたかを解明することである。先行研究として、セクシュアリティ形成の世代別変遷を明らかにした“Sexual Lifestyles in the Twentieth Century” Elina Haavio-Mannila et. al があげられる。

研究方法：学習指導要領の変遷と生まれた年度を対応させた世代分け区分別のインタビューガイドに基づく半構造化面接を行う。すなわち、小学校1年生から新制の学校に入学し、戦前の教育制度は経験していない第一世代(1940~1946年度生)から、中学・高校の性別教科が消えた後の第5世代(1978~1986年度生)別に、個別あるいは座談会方式による集団インタビュー調査を行い、データを収集する。

インタビューガイドの主要項目：A. 属性(性別、出身高校等) B. 教育的社会的変化と連動する事項 1. 中高で受けた性教育 2. 性情報源、C. 個人のジェンダー・セクシュアリティ観 3. 婚前交渉観 4. 結婚・離婚観 5. 性役割観。

分析視角：「世代」と「ジェンダー」による差の検討に置く。

解析方法：それらの項目と対象者の語りのデータを世代ごとにマトリックスにして、特徴を把握するマトリックス抽出法を用いる。

調査対象者：第4世代のみ13名、それ以外の世代は10名ずつで、計53名。男女比は

男性 23 名、女性 30 名で、全国 8 ブロックにわたっている。普通高校出身は 34 名、総合高校および職業高校出身は 19 名であった。

インタビューガイドに基づく結果と考察

1. 各項目の価値観や行動の画期をなしたのはどの世代か

53 名という限られた対象者で、彼らの意見や体験は地域や階層、家族像、出会った教師の違い等に影響されるという限界はあるが、各世代の大きな傾向や特徴は見いだせた。以下、2 項目のみを記す。

#### 【性教育】

5 世代を通じての性教育体験は、同時期の性教育政策の変遷と一定程度合致していた。第一世代でも、保健や生物で性教育を受けた者がいたことは 1950 年代から性教育に関する内容が学習指導要領に載せられていたことを反映。教科書レベルでは、第三世代になると、二次性徴や避妊も取り上げるなど性科学に基づいた性教育を進める方向に向かい、第四世代の高校の保健でさらに進化する。ただし、避妊については現在まで高校だけで中学では扱われない。第五世代はエイズ予防のための性教育が興隆し、小学校の保健と理科で性教育関連事項が取り上げられることになったことがデータにも反映。さらに、未だに多く見られる女子のみを対象とした初経教育は、第二世代から始まったことが明らかになったが、これは換言すれば、第二、第三世代の男子の多くは、性教育はほとんど受けていないことを意味する。第四世代でやっと、男子も性教育の対象になり、内容もより科学的なものに変化している。この背景には、70 年代に JASE の性教育講座などで育った教師たちが、80 年代には独自の組織を作って活動し始めており、教える側の教員の層の充実が考えられる。第五世代になると高校でより具体的な性教育が行われるようになるが、男女共に学ぶより科学的な性教育という点から見ると第四世代が画期をなしていると考えられる。

#### 【婚前交渉】

第一、第二世代では、婚前交渉は結婚を前提にした交際でも良くないこと、高校生にはありえないことであったが、第三、第四世代は、倫理的抵抗感は薄れるが妊娠の恐怖が行動を規制し、高校生の婚前交渉を非とする女子と、婚前交渉を当然とし、肯定する男子の増加という男女の意見が異なる世代である。ただし、第二世代にあった性規範が緩やかで、性が大人の公共空間の話題になり得ていた社会から、性産業が男子高校生にも浸透し始め、性的主体として自覚化しだした女子とのギャップが広がる時期でもある。第五世代になると、男女とも高校生の男女交際に性交も含まれると捉え、中には、恋人がいることが、一種のステータスだったという語りもある。

第三、第四世代が男女の意見が食い違う移行期だとすると、第五世代は男女共一致して、高校生の男女交際に性交が含まれると認識しているという点で画期をなしている。

2. 各世代を通じての青少年のセクシュアリティの特徴

第一第二世代の女子高校生の多くは結婚と性交を一体化して捉え、「離婚は世間体が悪い」からという理由で否定的であった。女性も経済的な自立意識を持つようにはなっているが決定権を父親がにぎるというような伝統的な家族のもとで育ち、多くは性規範も一夫一婦制を前提にした抑制されたものであった。一部の地域や階層では、性が大人の公共空間で話されるという環境がある一方で、第二次大戦前の女性への貞操要求と男性の性的放縦の容認というダブルスタンダードも垣間見られる。

この二重規範は第三世代の婚前交渉に対する男女の意識にも反映している。男子は性産業も視野に入れて、性交と結婚を比較的容易に切り離して考えられるが、女子は、直接、妊娠の恐怖にさらされるので慎重な行動をとらざるをえない。性教育も女子のみで男子は行われず、婚前交渉、離婚、家族像などの点に関する意見も、男女で異なっていた。

ところが、第四世代とくに 1980 年代～90 年代前半に高校生だった男女とも、ほとんどの項目で前時代との画期をなすほど、大きな変化を見せている。この世代の高校生の多くの親たちが共働きで、彼らはそれを見て育っており、ジェンダー平等的な家族の具体的なイメージを持っていたと考えられる。

また、時代背景も女子差別撤廃条約の批准のための国内法整備の一環として男女平等的な法制度を整えつつあった。性教育、家庭科教育とも男女共修に移行したのは、第四世代であり、これらが第四世代の高校生のセクシュアリティ形成に多大な影響を与えたであろうことが推測される。また、第三世代あたりから、若者の婚前交渉もありえるという認識に変わりつつあっても、妊娠の恐怖が行動規制になっていた。これは第四、第五世代にも共通して聞かれた語りである。この背景には、戦後一貫して若者の性的自立を否定し、避妊や性感染症予防なども含むセクシュアル・ヘルスに関する知識とスキルの提供を積極的に行わなかった教育政策の結果でもある。中高生のセクシュアル・ヘルスに関する教育を国際的な水準まで充実させていくこと、そのためのあらゆる取り組みを強めていくことが日本の喫緊の課題である。

#### (4) 大学生世代への質問紙調査

調査対象者

本調査では、第 6 世代にあたる 1987-1996 年度生まれの大学生を対象とした。調査は 2014 年 12 月～2015 年 10 月にかけて行った。

質問項目

質問紙は問1～問19から成り立っており、その内容は「性・ジェンダー平等に関する経験」「恋人との交際」「性についての会話」「コミュニケーション」「性・身体・生き方に関わる価値観」「デートDVの許容度」「インターネットと性」「性のイメージ」などである。

#### データの解析

分析には男子データ226部、女子データ272部を使用した。データの統計的処理には統計解析ソフト「SPSS Ver.22.0」を用いた。

#### 主な結果と考察

男性よりも女性のほうが、高校時代に学校や家庭で性別役割分業に基づいた指導をされることがあったと答えていた。「課外活動や生活指導などで男らしく・女らしくするよう教員に言われた」は男女とも7割前後の学生があったと答えているほか、「家庭で、男子だから（女子だから）という理由で、家事を手伝うように言われた」は男性は25.2%、女性は57.2%があったと答えている。このことから第6世代は進路選択などの場面において性別に基づいた指導はされていないが、生活指導や家庭内での家事分担などにおいては、性別を理由とした規範に従うような指導が何らかの形であったことがわかった。しかし興味深いのは、前述したように約4分の1の男性が「男子だからという理由で家事を手伝うように言われた」経験があると答えていることである。これは恐らく、共働きが現実的な選択となる第6世代に対して、男性も家事ができなくてはならないといった意図での指導であると考えられる。しかし性・ジェンダーの学習経験については男女差がなかった。第6世代では、性教育関連の単元が含まれる保健や家庭科が共修化されているため、妥当な結果であると考えられる。

高校時代の恋人との交際で許容できる交際内容の程度は、性交なしの交際で男女差が見られなかったが、性交を視野に入れた交際では、女性よりも男性の方が有意にそういった交際も「あると思っていた」と回答。

性について家族や友人と話すかどうかはその話題・テーマやまじめな話として話すのか、興味本位に話すのかによって男女差が異なってくる。男性は女性よりもマスターベーションについて、まじめにも興味本位にも人と話していた。また、結婚や恋愛、月経や射精についてはまじめにも興味本位にも、女性のほうが人と話している。まじめな性の話を誰ともしなかったのは男性が多く、興味本位の性の話を誰ともしなかったのは女性が多い。科学的で具体的な知識を得るための性教育をすることが難しく、かつ男性が避妊や性行動の主導権をとる傾向のある日本の現状では、男性がまじめに性の話をする相手がいけないというのは大きな問題につながる可能性があると考えられる。

コミュニケーション希求のなかでも恋人が欲しいという欲求は男性のほうが高く、友人希求は女性のほうが高い結果になっている。

また、男女ともに恋人希求より友人希求のほうが有意に高い。近年、若者のコミュニケーション不全が問題になることが多いが、本調査の対象者のコミュニケーション希求は4件法で2.00を超えており、コミュニケーション希求が低いとは言えない。ただしコミュニケーションに関連する項目は若者の能力や自尊感情を測る上で重要な指標であることが予想されるため、今後、コミュニケーション希求の高い群と低い群の比較など、コミュニケーション希求を軸とした分析が必要。

「結婚後の役割」は結婚後や出産後に女性が退職することや女性が家事を担うこと、男性が家事を担うことなどを含む変数であり、女性よりも男性の方が有意に肯定感が高かった。下位項目を見ても、男女差がない「共働きの夫婦で、男性が家事を主に担うこと」以外の3項目で男性の方が有意に肯定的な評価をしている。つまり男性の方が女性に専業主婦的な役割を担って欲しいと考えているということが言える。前述したように女性が多様な生き方を肯定している一方で、男性が性別役割分業に沿った結婚後の役割分担を好ましく思っているということは、生き方に関わる男女の考え方や価値観におおきな違いが生じているということであり、今後、晩婚化の促進や離婚率の増加に関わってくる可能性もあると考えられる。

男性の方が女性よりもデートDVを許容する傾向があることがわかった。下位項目を見ると、身体的暴力や束縛の許容には男女差が見られないが、性的関係の強要と本人が望まない性的関係を持つことを、許されると答える傾向は男性の方が高かった。

性のイメージについては、男性は肯定的イメージを女性よりも持っている一方で、女性是否定的イメージを男性よりも持っていることが明らかになった。この原因として、学校の授業などの公的な情報源からは、性を望まない妊娠や性感染症の予防といった、トラブルを招くものとしての側面から扱うことが多いこと、また性暴力などの話題においても、女性が被害者になることを前提とした教育が多いこと、さらにインターネットなどの私的な情報源からは女性が性的対象として搾取されているコンテンツが多いことなどがあるのではないかと考えられる。表現の自由といった観点から、インターネットコンテンツの規制は難しいが、教育場面においては欧州の教科書にあったように性を豊かな、男女ともが楽しめるものということを前提にしたうえで、リスクを回避する方法を学べるよう工夫をしていく必要がある。

#### 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計21件)

橋本紀子「ジェンダー・セクシュアリティと教育—海外の性教育関連教科書から

日本の性教育を見直すー」女子栄養大学『女子栄養大学紀要』第46号、2015年、pp.27-39 査読有り

<http://www.i-repository.net/il/cont/01/G0000155repository/000/308/000308538.pdf>

森岡真梨「大学生の性とジェンダー平等をとりまく現状」女子栄養大学『教育学研究室紀要 - <教育とジェンダー> 研究 - 』12号、2015年、pp.70-84 査読無し

<http://www.i-repository.net/il/cont/01/G0000155repository/000/300/000300871.pdf>

澤村文香「日本における理科教育の変遷と高等学校教科書『生物』に於ける『ヒト』の取り扱いについて」女子栄養大学『教育学研究室紀要 - <教育とジェンダー> 研究 - 』11号、2014年、pp.20-23 査読無し

<http://www.i-repository.net/il/cont/01/G0000155repository/000/006/000006430.pdf>

橋本紀子「ジェンダー平等意識・セクシュアリティ形成に関する世代別調査報告」女子栄養大学『教育学研究室紀要 - <教育とジェンダー> 研究 - 』11号、2014年、pp.34-51 査読無し

<http://www.i-repository.net/il/cont/01/G0000155repository/000/006/000006431.pdf>

森岡真梨「2013年欧州（フィンランド・フランス・ドイツ）調査報告」女子栄養大学『教育学研究室紀要 - <教育とジェンダー> 研究 - 』11号、2014年、pp.52-72 査読無し

<http://www.i-repository.net/il/cont/01/G0000155repository/000/006/000006432.pdf>

池谷壽夫「1960年代後半からドイツ再統一までのDDRにおける生物教授プランの変遷と性教育」、『日本福祉大学研究紀要 現代と文化』第130号、2014年、pp.117-153. 査読有り

[https://nfu.repo.nii.ac.jp/?action=repository\\_uri&item\\_id=1773&file\\_id=18&file\\_no=1](https://nfu.repo.nii.ac.jp/?action=repository_uri&item_id=1773&file_id=18&file_no=1)

田代美江子「学習指導要領の枠組みの中で日本の性教育の可能性を考える 『日本における包括的性教育の手引き』構築の試み」、『エイデル研究所 季刊セクシュアリティ』第65号、2014年、pp.22-37. 査読無し

池谷壽夫「『ヨーロッパにおけるセクシュアリティ教育スタンダード』 その背景と特徴」、『エイデル研究所 季刊セクシュアリティ』第65号、2014年、pp.92-101. 査読無し

池谷壽夫「性的健康とパートナーシップのための性教育 80年代DDRにおける性教育の特徴と問題点」日本福祉大学『社会福祉論集』129号 2013年 pp.59-98 査読有り

[https://nfu.repo.nii.ac.jp/?action=repository\\_uri&item\\_id=2108&file\\_id=18&file\\_no=1](https://nfu.repo.nii.ac.jp/?action=repository_uri&item_id=2108&file_id=18&file_no=1)

[学会発表](計 0 件)

[図書](計 3 件)

池谷壽夫・橋本紀子・田代美江子・茂木輝順ほか『ジェンダー・セクシュアリティと教育』民主教育研究所、年報15、2015年、総ページ数265

橋本紀子・田代美江子・関口久志・井上恵美子・良香織・茂木輝順・丸井淑美・森岡真梨ほか『ハタチまでに知っておきたい性のこと』大月書店 2014年 pp.2-63, 107-42, 153-175

## 6. 研究組織

### (1) 研究代表者

橋本 紀子 (HASHIMOTO, Noriko)  
女子栄養大学・栄養学部・教授  
研究者番号：20138530

### (2) 研究分担者

井上 恵美子 (80259316)  
フェリス学院大学・文学部・教授  
研究者番号：80259316

池谷 壽夫 (IKEYA, Hisao)  
了徳寺大学・健康科学部・教授  
研究者番号：90136367

田代 美江子 (TASHIRO, Mieko)  
埼玉大学・教育学部・教授  
研究者番号：40297049

関口 久志 (SEKIGUCHI, Hisashi)  
京都教育大学・教育学部・教授  
研究者番号：70598755

良 香織 (USHITORA, Kaori)  
宇都宮大学・教育学部・准教授  
研究者番号：10459224

### (3) 連携研究者

森岡 真梨 (MORIOKA, Mari)  
女子栄養大学・特別研究員  
研究者番号：00747545

茂木 輝順 (MOTEGI, Terunori)  
女子栄養大学栄養科学研究所・客員研究員  
研究者番号：40570677

### (4) 研究協力者

田中 和江 (TANAKA, Kazue)

丸井 淑美 (MARUI, Yoshimi)

澤村 文香 (SAWAMURA, Fumika)